

主よ、御心に留めてください

人はその人生においてさまざまな苦難に出会う。それらは避けがたい。しかし、そのような中で神が、そして少数者ではあっても信仰の仲間が、自分のことを「心に留めてくださる」、「記憶してくださる」ことを喜ぼう。そして、神はまた、しばしば私たちに苦難を与える者、その愚かで、悪しき業をも「心に留め」「忘れていない」。これこそ慰めである。自分で報復する必要はない。救済の歴史においてかつて経験したことが再び今も、将来にも起こり、信仰者たちは助けられ、神に賛美を歌うであろう。

「永遠」が 1 節、3 節（原語は少し違う）、10 節、19 節に登場するのも印象的である。過ぎ去るものをそのようなものとして喜び、慈しみ、悲しみ、「とこしえのもの」を喜び、畏れることができますように！

神殿と地方聖所が敵の手によって破壊される（前 587 年のバビロニアによって、あるいは、168 年のマカベヤ戦争の時、あるいは、ずっと以前のレハベアム時代？）という未曾有の苦難を思い浮かべながら、詩編 74 編を何度か素読して心に響くことは以上のことである。神の臨在のしるしである神殿が崩壊しても、神との関係、信仰は残るのである。主なる神はいにしえよりの「わたしの王である」（12 節）。

1. 羊の群れに御心を留めてください 1-2 節

詩人は自らを神の「羊の群れ」（牧場の羊たち）、「あなたの会衆」、「あなたの嗣業の部族」であり、あなた＝神が、かつて「買い取られた」、「贖われたもの」と言う。それらを「記憶して下さい」「思い出して下さい」「み心に留めてください」と祈願する。同じ動詞が 18 節にも登場し、「主よ」と呼びかけながら今度は、信仰者ではなく、神の名を侮り、愚かな人々を記憶して下さいと願っている。22 節でも神を嘲る者たちを心に留めてください」と叫ぶ。20 節の「契約を顧みてください」は「尊重して下さい」（respect）というような意味であるが、「御心に留める」と似た感触である。「思い起こすこと」は消極的表現では、否定的表現では、「忘れさらない」（19 節）、「決して忘れない」（23 節）ということであろう。主なる神がその民を決して忘れず、「御心に留めてくださること」、神を侮る者たちをも記憶しておられること、審いてくださる、このことを心に留めておこう。

2. 廃墟と化した聖所と預言者の不在（3-9 節）

エルサレム神殿は廃墟となり、敵対する者たちが至聖所まで乱入し、自分たちの偶像を立てる始末である。神殿の調度品や彫刻なども破壊し、火をかけた。これは極端なモリレムによるバーミアンの破壊など様々な時代、様々な処で起こったことであろう。「宗教弾圧」（8 節）こそ、文化の弾圧、社会の破壊である。今もウクライナで起こっていることである。また、旧統一協会、現在の「世界平和統一家庭連合」はカルトそのものであるが、安倍元首相ら多くの政治家と関係して日本社会を動かしていることが話題となっている。それは随分前に分かっていたことであるが、安倍元首相の殺害犯と絡んで問題になっている。この事件が、「思想・宗教」の弾圧のきっかけとなること、安倍の「国葬」などの疑似宗教化ナショナリズムにも警戒である。「神の会堂」は、神と出会い、隣人と出会う集会場のこと。イスラエルに散在した地方の集会場も焼き払われてしまった。

宗教の弾圧と衰退は人を生かす「言葉」の衰退であり、預言者の不在である（9 節）。預言者、彼ら彼女らの語る神の言葉こそ神の「しるし」なのだろうか？あるいは、4 節の敵の「旗印」と比較して、イ

スラエルの旗印であろうか？ 預言者と神の言葉の不在を思い、日本社会の宗教的、精神的「虚無」を憂う。

3. 過去の救済史の想起 (12 節 - 15 節)

15 節から出エジプトの際の紅海渡渉の奇跡が思い返される。神は「海を分け」られた。それが神話的表象（竜やレビヤタンの征服）と結びつけられる。この表象が救済の歴史を創造の神と結び付ける。神は混沌の中に光と秩序を与えられた。

4. 被造世界 (16-17 節)

出エジプトの際の神の歴史的介入に加えて、16-17 節は神が太陽や月、星を造られ、夜と昼を分かち、地の境を定め、夏と冬というリズムを与えて下さったことを歌う。「地の境」とは海と陸（砂漠）の境のこととで「地境」のことではないのだろう。

5. 貧しい者たちを覚えてください

19 節には「貧しい人々のいのち」、21 節には「虐げられた人」、「貧しい人」、「乏しい人」が登場し、彼ら彼女等こそ主がみ心に留められる者たちであり、主のみ名を讃美する(ハレル)人々ではないかと訴えている。貧しい者、乏しい者とはイスラエルの民なのである。

6. 主よ、立ち上がって下さい (22-23 節)

悪しき者たちの跋扈することに心を痛める信仰者は、神よ「なぜ、手を引いてしまわれたのですか、右の御手は、ふところに入れられたまま」(11 節)と嘆く。擬人化された神不在に見えるこの世界への嘆きは心打つものがある。しかし、詩・祈りの最後は「神よ、立ち上がり、御自分のために争ってください」で結ばれる。イスラエルのためでもあろうが、侮られている神ご自身のために、立ち上がり、ご自身の栄誉のために争ってくださいと言う。私たちの祈りが、わたし、わたしたちの為だけでなく、神ご自身のためにという祈りへと引き上げられますように。